

# 四 恩 園



変あるを共に

明けましておめでとーございます

# 今年はこれからの法人の行方を考える年



社会福祉法人 北海長正会  
理事長 三瓶 徹

法人は来年の二〇二六年で五十年を迎え、法人の歩みでは大きな節目の年となります。今年、これまでの半世紀を振り返り、これからの法人の行方を考える大切な年となります。地域を支える法人の取り組みは、その時々々の制度や時代の状況に応じ変わっていくものでなければならぬものです。地域社会の環境（社会・経済・世相等）はいろいろな面で厳しさを増してきております。法人の事業は地域とともにあり、地域にある課題に向き合いながら事業を展開していくことが事業の継続につながるかと信じています。これからの

法人の取り組みのポイントとなる五つのことからについて簡単にまとめてみました。

## 超高齢化の団地地区に求められる法人の力量

ご承知の通り団地地区の高齢化は団塊の世代の高齢化とともにあります。北広島市は団地造成により団塊の世代を中心に人口が急激に増加しました。団地の高齢化は急激です。二〇〇三年二・一％の高齢化率が二〇一五年四〇・六％と十二年間でほぼ二倍になりました。現在では、団地の高齢化は四七・五％で団地の約半数が高齢者言えます。なかでも団地の

七十五歳以上は二九・二％と三人に一人が後期高齢者です。後期高齢者はフレイルによる身体機能の低下が顕著となり、病气やケガのリスクが高くなることや、独居高齢者の増加による孤独・孤立化など地域交流に向けた幅広い対応が必要となります。また、二〇四〇年には団塊ジュニアが六十五歳を迎え、北広島市の高齢化率は四〇％を超えると言われてます。これから益々超高齢化する地域で住民が安心して暮らすことができようさらなる事業の充実と継続など法人の力量がさらに求められます。

## 障がい者の自立支援と地域移行

国の障がい者の地域生活への移行や就労支援は、二〇〇六年の障害者自立支援法から福祉施設や事業体系の見直しから始まりました。その後、障がい者施設の定員削減のための施策が打ち出されています。法人は一九七七年に開所した重度身体障害者更生援護施設である更生部を二〇二一年に廃止しました。法人の最初の施設である更生部は、創業者の長澤雄七氏が脳血管障害者や脳性麻痺等の障害者が利用できるリハビリ施設がなかったことから土地を寄付し施

## インタビュー 「今年の抱負」

福島 昭様  
昭和16年生まれ  
(サ高住しおん)



お客様

七転び八起きの人生には浮き沈みが多いという……ので、しづとく生きよう。

しおんに入居してから竹山にある農園での畑仕事、ご友人とのファイターズ観戦やゴルフに外出されています。

新田さくら様  
昭和4年生まれ  
(デイホームかたる)



お客様

猫とお互いを  
寄り合いながら暮らしたい

猫が好きでこれまでに最大で9匹も飼っていて、今は、猫たちは3姉妹で18才。人間の年齢で言えばほぼ同じ年。お互い耳が遠くなったり、足の運びが悪くなったりと同じように老化してます。

木村文子様  
昭和4年生まれ  
(サ高住しおん)



お客様

日記を綴り、  
好きな読書も続けたい

18歳で保健師になり、24歳で結婚、2男をもうけた後も保健師や養護教諭として働きました。しおんに住んで2年。毎日、日々の面白かったことなどを日記につけています。

設を創設したことに始まります。更生部は、脳外やリハビリの病院も増え、介護保険制度と相まってその役割は終えたと云えます。在宅での生活が困難な最重度の障がい者の施設である療護部はこれからも必要であります。時代の流れを見据えつつ地域とのつながりを育て、在宅であっても施設利用であつても障がいの地域移行と自立支援に向けた取り組みはこれからも欠かせないものであります。

### 大規模修繕と私たちの意識改革

高齢者施設、障がい者施設は大規模修繕の時期を迎えています。それぞれの施設は地域にとって無くてはならない資源です。要介護高齢者や重度の障がい者はこれらも増え続けます。これらの施設は事業継続のため修繕は欠かせないものです。大規模修繕は単に施設を綺麗にすることだけで終わらないものです。これまでの施設サービスを振り返り、業務の内容や動線、業務のムリ・ムラ・ムダが機能・構造的に無いかなどをチェックし、働きやすい職場に変えていくことが重要です。施設の形は容易に変えられませんが、大規模修繕を機に私たちの意識を変えられるまたとない機会でありま

す。職員一人ひとりが修繕に関わりアイデアを出し合い、効率良く効果的なサービスが提供できるようハード・ソフト両面の検討が望まれます。人材確保が困難な時代にあつて、時は一丁化でありロボットの含めいろいろな機器が進化し、介護現場は大きく変わってきています。それらによる働きやすさを目指し、お客様の喜びにつながる大規模修繕にしたいものです。

### 新規事業(孤独・孤立)への取り組み

事業は時代と共に変わっていくものです。法人のあゆみを振り返り、事業を始めたときから人のつながることの大切さやその思がありました。その取り組みの象徴は「ふれて」をはじめ「ともに」「みなみ」の地域交流にあらわれています。交流事業で知り合った人たちがお互いに助け合うというエピソードも沢山あります。これからの課題は、後期高齢者の孤独・孤立とフレイルによる機能低下への対応です。この二つの課題を趣味特化型フィットネス事業により取り組みたいと考えています。

もう一つは、更生部の空き室を活用したサービス付き高齢者向け住宅(サ高住)の取り組みです。

これも地域の高齢化による孤独・孤立への対策につながる事業です。サ高住を利用するお客様にとって、障がい者施設にある診療所やデイサービス、隣設する特別養護老人ホームの利用、それぞれの事業におけるイベントへの参加等は付加価値となるものです。

### 必須となる三位一体の取り組み

これからの事業は、住民、行政、法人の三位一体の取り組みが力ギとなります。誰のための何のための取り組みなのかを考え、住民が安心して暮らすことのできる地域にするために、三位一体は欠くことが出来ないものです。これまでの取り組みで生まれた市民スタッフの存在は住民の力として掛け替えのないものです。市民スタッフの人たちの活躍は、地域の人たちの生活を豊かにしてくれています。市民スタッフの人たちが交流事業に「人生の楽園」を見つけ、その和の広がりがこの地域を支えていく大きな力になっていきます。

法人の五十周年を機に、三位一体の取り組みの充実を図り、つながっていくことがこの地域で安心暮らすことのできる条件であることとお互いに理解していくことが肝要であると云えます。

令和7年 巳年

年男さん・年女さんへ

久保田朱香

平成13年生まれ  
(ホームヘルプサービス  
ステーション四恩園  
訪問介護員)



巳のように柔軟に考え前進したい

新卒1年目の後半になってやっと自分で考えて仕事を組み立てられるようになってきました。今年は壁にぶつかることがあつても、あらゆる方向へ曲げることが出来る巳(へび)のように柔軟に考えて前進していきたいと思ひます。

伊東賢志朗

昭和52年生まれ  
(居宅介護支援事業所  
四恩園 係長)



行雲流水

地域の皆様がより良く生活できるように邁進し過ぎて足の指を骨折するという「蛇足」もついてもしまひました……。流れに任せつつ、出会う皆様と笑いあえる日々をつくらなければと思ひます。

片野和広様

昭和28年生まれ  
(デイサービスセンター  
四恩園 お客様)



元気でいるために四恩園

でのウォーキング頑張ります。



# 生涯現役地域づくり環境整備事業から見えたもの

「私たち大人の「生涯現役」への楽しむ力が、  
未来をつくる子供たちの力となる」

事務局長（地域サポートセンターともに施設長） 向山 篤

（生涯現役社会の実現に向けて）

北広島市では、令和四（二〇二二）年度から三年間厚生労働省の「生涯現役地域づくり環境整備事業」を受託。シルバーク世代や専業主婦等の多様な就労、地域での活動や参加を促す新しい仕組みをつくり、誰もが人生を楽しみながら活躍し続ける生涯現役社会の実現をねらいとしています。生涯現役であることによる労働人口不足や社会保障費増大などの課題解決も背景にあるでしょう。北広島市における取組みでは、協議会事務局を地域サポートセンターともに置き、住民を中心とした協議会を結成しました。

（地域の方々の意見を反映）

住民の声を基に、住民自らが企画し実践する方法を取り入れました。北広島団地地区を対象とした住民アンケート（回収二五〇〇件）、及び三回実施した住民ワークショップではともにの体育館に総勢二七〇名が集まり、「私の夢とロマン」「二歩踏み出せない理由」をテーマに話し

合いました。地域の方々一人ひとりの言葉の中にはたくさんのお楽しみや愛情と少しのモヤモヤがありました。「愛すべき北広島の自然を大切にしたい」「ワンちゃんを介して人が集う楽しい場が欲しい」「見守りと支え合いの愛情の街にしたい」「年金受給者ですが、月二〜三万円の収入で良いので働きたい」「人生を楽しみ続けるために、いつまでも健康でいたい」という、楽しみたい、学びたい、働きたい、つながりたい、健康でいたいという本能的に近いワクワクが聞かれました。その反面「将来一人になる不安がある」「病気、家財、家や財産のこと……整理できない」など、特にシルバーク世代の中には、夢や欲求を達成できていない、またはそれに向かつて動き出せていないモヤモヤが約三〇%の人にあることも分かりました。

（ピンコロ健康づくり）

昨今急に言われるようになった「人生一〇〇年時代」ですが、自らの今後の人生をどのように生きていきたいのかを見

つめ、実践するということはそう簡単なことではないように思えます。しかし、多くの方々は「健康でいたい、楽しみたい、学びたい、働きたい、つながりたい、そして人生の最期は苦しまずにピンピンコロリで」と笑顔で語っています。それを叶えるものの大きな一つが「健康づくり」であることも知っています。

（フィットネスで楽しい人生を）

そこで今後の取組みとして、二〇二六年四月開設予定で地域サポートセンターともにを拠点としたフィットネス事業を立ち上げることにしました。そして地域の皆様方と一緒に、全世代型健康づくりと、一歩踏み出せないモヤモヤをワクワクへ変換することで、「誰もが人生を楽しみ続けることが出来る、つながりの街北広島」をつくっていききたいと思っております。

「自らの健康と幸せの追求が、子供、孫などの将来北広島をつくる後輩たちの幸せにつながることを信じて」



木と自然を楽しむスウェーデントーチ



ともにのグラウンドにドッグランが完成



夢とロマンを話し合った住民ワークショップ

# 未来に向けた 四恩園プロジェクトX が動き出しています

## ～特養四恩園大規模改修工事に向けて～

施設サービス課

課長 清水孝修



平成七年（一九九五年）特別養護老人ホーム「北広島リハビリテーション特養部四恩園」が開設され二〇二五年には開設三十年を迎えることとなります。

開設当時の一九九五年には内閣府より障害者プラン「ノーモライゼーション七か年戦略（高齢者や障害のある人が障害のない人と同等に生活し、ともにいききと活動できる社会を目指す理念）」が策定されており、特色には①地域で共に生活するために②社会定期自立を促進するために③バリアフリー化を促進するために④生活の質の向上を目指して⑤安全な暮らしを確保するために⑥心のバリアを取り除くために⑦我が国にふさわしい国際協力・国際交流を、と定義されています。

三十年後の現在の特養四恩園での支援と照らし、施設に入所されても地域社会や家族とのつながりを継続し、入所時にはその方のお一人お一人の向かうべき道（終末期）までの生きざる支援・人生会議の位置付、日常介護ケア・生活支援・相談業務効率の向上の視点からICTや福祉機器活用・通信機能連携・感染予防への対応、労働環境でも国際交流・外国人労働者の就労（現メンバー出身職員二名配置、大学実習生も外国人含む受け入れやインターン就労など国の政策に則した支援取り組みが三十年の歴史の中で日々積み重ねてきました。



しかしながら築三十年経過するお客様支援の基盤となる建物ハード面では経年劣化は否めなく、部分的な修繕では追い付かず、四恩園そのものの大規模修繕が必要とされ、これからのお客様支援、職員の活躍促進、地域に選ばれる事業所運営・高齢者支援の母体としての機能維持継続として取り組んでいかなくてはならない状況であります。

従来の建物の特色である石狩平野を一望できる現三瓶徹理事長が描いた理想的、魅力的な桃源郷のような生活拠点としての特色と、これからも多くのお客様との出会いと人生の終末までの歩みを重ねられる地域サポート拠点となること、今以降十年・二十年・三十年先まで皆様に愛され選ばれ続ける四恩園であることを願います。



笑顔でつながる日々

ミャンマー出身職員の魅力に迫る

四恩園では、現在三名のミャンマー出身の職員が勤務しています。なぜ遠く日本で介護の仕事を目指したのか。お国のこと、将来のことなどをお聞きしました。

- ① 日本で介護の仕事をするきっかけ
- ② 故郷への想い
- ③ 仕事に対しての思い、将来への希望

マイビビウィンさん

(特別養護老人ホーム四恩園勤務)

①(日本で介護の仕事をするきっかけ)  
ミャンマーでは外国で仕事をしたいという人が多いです。最初は日本で働きたいという事しか思っていませんでしたが、将来私が両親の面倒を見たいと思ったときに介護の仕事で知識や技術



を身につけたいと思って希望しました。日本語学校に一年通い最初は技能実習生として働き始め、今介護職員実務者研修を受けています。それが終了したら介護福祉士の取得を目指したいと思っています。(他のミャンマー人では、卵工場やビルクリーニング、外食レストラン、ホテルで働く人がいるとのこと)

②(故郷への想い)

私は両親はじめ家族が大好きです。それに育ててもらった恩があります。ホームシックにはなりません、ほぼ毎日離れた両親とテレビ電話をしています。ミャンマーでは医療保険制度が存在しなく気軽に病院へ掛かることができず介護施設もありません。高齢者

の介護は家族が家で行いヘルパーも裕福な一部の国民しか使えなく、最期も家で看取る事がほとんどです。平均寿命は六十歳代〜七十歳代です。加えてミャンマーでは、国内で紛争が絶え間なく起こっています。実家の周りでも爆弾が落ちたり、軍の兵隊が監視に立っています。二十歳代の若者は兵隊に呼び止められ「軍隊に入れ」と言われるので、なるべく近寄らないようにしています。基本的に一般市民はかなり貧乏な生活です。実家もそう

ですが両親が働けなくなった時に子ども達がまだ学生という事はよくある話で、父一人だけの収入では家族を賄いきれません。今は兄、妹はタイで働き、私は日本で働いて両親や弟へ仕送りをしています。

③(仕事に対しての思い、将来への希望)

テレビなどで施設職員が虐待を起してしまふニュースを見たことがあります。親や家族への愛情が深いミャンマー人としての気質から見れば、これはすごく残念なことだと思います。介護の基本は「まず声かけや話をする事。」と教わりました。虐待してしまう人にも「まず話をしなさい」と言っただけです。私も勤務中は「今の声かけはあまり良くない言葉だったな……」と振り返りをする事があります。加えて今も実務者研修で沢山の知識を勉強しています。この学んだ事を仕事

に活かして改善できればと思っています。この先再び平和を取り戻してあげれば母国へ帰りたいなとも思っていますが、今は私が介護の資格を取得して日本へ両親を連れてきたいと考えています。

ズインマートンさん

(特別養護老人ホーム四恩園勤務)

①(日本で介護の仕事をするきっかけ)

昔から、「忍者」や「サムライ」に興味があって、レンタル屋さんで映画を借りてきて観たり、日本語を勉強していました。ミャンマーでは、僧院でお坊さんが無償で外国語を教えてくださいます。そこで私も教えてもらいました。ボランティアとして私もそこで日本語を教えたり、日本から来る観光客の方をガイドする仕事なんかもしていました。その会社のオーナーさんが「日本に来ないか?」と言ってくれたのがきっかけです。ミャンマーでもた



くさん仕事があるとも言われたかったんですが、私は日本に来たかったんです。また貧しい方や体の不自由な方のお手伝いのボランティアもずっととしていて、人のために役にたてる介護の仕事に興味を持ちました。

### ②(故郷への想い)

実家はミャンマーの真ん中あたりで、両親と姉夫婦と姪っ子が一緒に住んでいて、それとは別にお兄ちゃんがミャンマーに一人います。北部の兄が住んでいる地域は、冬にはマイナス十二度、十三度にもなると雪も降ります。逆に南部は四十七度とかにもなることがあるんです。父は脳梗塞で、右片麻痺があつてほとんどのことを覚えていられません。でも、私のミャンマーでの呼び名「デテ」だけは覚えていて、いつも「デテ、デテ」と言っています。お父さんとテレビ電話する時に、私が画面に映るとすごくニコニコしてくれて、私がお母さんと話していても横から「んー！」って言いながら顔を出さなです。ミャンマーは貧しくて体がない

自由な人が寄付やお手伝いを受けて入る施設はあるんですが、父のような体の人が入れる施設はありません。だから、お母さんがお父さんを介助しています。ミャンマーではそれが普通なんです。

### ③(仕事に対する思い、将来への希望)

お客様のトイレを手伝っても、立ち上がれなかった方が声をかけたらうまく立ってたりします。お客様の手伝いした後「ちゃんとやってくれるね」と言われるととても嬉しいです。目だけ開けて、体も動けなくて表情が少ない方に私が声をかけたら、急に笑って来て、その方の娘さんがとても驚いていました。

笑わない人でも、一瞬でもいいから笑顔にしたい。それが私のやりがいだと思っています。将来は故郷に戻って介護の学校を作りたい夢があります。ミャンマーで私が介護を学んだ時は教科書を丸まんま理解する事のみでした。移乗も排泄も色んな注意事項があるので、今の経験を活かして教えたいです。

### プーミヤミヤシユエーさん

(グループホーム四恩園勤務)

### ①(日本で介護の仕事をするきっかけ)

大学では語学(外国語)の勉強をし



てきました。外国の映画を見ているときに、「自分のこんな風にするら外国語が話せるようになれば良いの」と思い続けていた事が勉強の道に進んだきっかけです。将来は日本で働きたいという思いもあったので、日本語も沢山勉強してきました。仕事を考えた時にミャンマーで働くことは思いませんでした。日本でどうやって働くのかと考えた時に、座りっぱなしのオフィスワーカーは何となく合わないと思いました。日本語学校の先生が身体を使う仕事がいいなと。介護の仕事は身体を使いコミュニケーションが大切な仕事だと思ったので決めました。

### ②(故郷への想い)

父は教師を退職して家にいます。母は現役で教師をしています。兄がいましたが、二年前に亡くなりました。私が日本に行くことについては、父は全面的に応援してくれました。母は「お父さんも応援するならいいんじゃない」と言ってくれましたが、体調心配等もしてくれています。私の実家が

ある場所は中心街から離れた山の方にあり、近くで爆弾が落ちたりする危険はあまりありません。しかし、社会情勢が不安定で貧富の差が大きく、若者みんなが逃げ出したい国がミャンマーであり、あまり明るい希望は持てないです。ミャンマーは暑い国で暑さには強いと思っていました。日本に来てから暑さに弱く寒さに強い体調になりました。

### ③(仕事に対する思い、将来への希望)

日本語はある程度習得し、学生として介護実習を経験して現場に入りましたが、仕事の責任の重さを実感しています。食事、入浴、口腔ケアとあらゆる介助を行いながら、お客様とコミュニケーションをとっています。意思疎通の難しい方や、浜言葉のような方言が理解出来ない時もあり、時には言われるがまま受け取る場合もあります。話を繰り返すうちにこたえてくれたり、自分を頼りにしてくれるととてもやりがいを感じます。また自分の体調が疲れ気味だったりする時は周りの職員が理解してくれ、休ませてくれたりする事が本当にありがたい事だと思っています。その先の夢としては、アメリカで暮らしてみたいです。アメリカの人と英語がすらすら話せる事に憧れます。難しいフランス語も話せるように挑戦してみたいですね。

# ENJOY ボッチャ!

～身体を動かして楽しみながら健康づくり～

社会福祉法人北海長正会では、高齢の方、障がいのある方だれもが身体を動かして楽しみながら健康づくりを行うユニースポーツへの取組みとして、高齢者施設と障がい者施設の両方で二〇二四年度よりボッチャを始めます。

ボッチャはヨーロッパで生まれた重度脳性麻痺の方や四肢重度障がいの方のために考案されたスポーツで、パラリンピックの正式種目となっております。最近注目されたユニースとしては二〇二四年のパリ・パラリンピックにて、脳性麻痺の男女混合チームが銅メダル（二〇一六年リオデジャネイロ大会の銀、前回二〇二二年東京大会の銅に続き三大会連続のメダル）を獲得した事が記憶に新しい事と思います。

地域サポートセンターともに、地域交流ホームふれてでは、入居されているお客様や通所されているお客様と、地域の方々が一緒に毎週練習をしています。最初はルールを覚える所から試しにやってみようという気持ちで始まったものが、今では戦略を考えてどう得点していくかという所まで発展し、楽しみの中にも熱気が伝わってきます。

十一月九日（土）に北広島市総合体育館で開催された「北広島ボッチャファミリーカップ2024」では、ふれての四チームが真っ赤なユニフォーム姿で出場。うち三チームが決勝リーグへ進出。決勝リーグへ進出した一チームが第四位という大変優秀な成績を収めました。また優勝は障がい者施設のお客様と職員の混合チームでした。

大会を経験したメンバーは、次の新たな大会に向けて練習を始めます。皆さんも一緒に楽しみながら身体を動かしてみませんか？



## ENJOYボッチャ!

●地域サポートセンターともに  
毎週火曜日、11:00～11:45  
(お問い合わせ: 地域サポートセンターともに)  
011-373-7007

●地域交流ホームふれて  
毎週水曜日、11:00～11:45  
(お問い合わせ: みなみ高齢者支援センター)  
011-372-8110

この広報誌のアンケートにご協力をお願いします。こちらから↓



●発行者 **社会福祉法人 北海長正会**  
●住所 〒061-1153  
北広島市富ヶ岡509-31  
●TEL (011)373-6655  
●FAX (011)373-6611

●ホームページ <http://www.shionen.or.jp>  
●E-mail [tokuyo@shionen.or.jp](mailto:tokuyo@shionen.or.jp)  
●編集発行 広報委員会  
●編集発行責任者 理事長 三瓶 徹  
●発行日 2025年1月

